

第18回 市民と市長のふれあいトーク
報告書（要点）

日時：令和4年7月1日（金）午後7時から9時

会場：市役所対策本部室

テーマ：「誰もが輝き にぎわうまちへ ～多文化共生を育むのに必要なこと～」

出席者：公益財団法人武蔵野市国際交流協会、武蔵野市第六期長期計画・調整計画策定委員会（多文化共生推進懇談会）、特別養護老人ホームさくらえん、八幡町コミュニティ協議会、吉祥寺まち案内所コンシェルジュ実行委員会、市交流事業参加者、帰国・外国人教育相談室 各団体より 計8名
（ブラッシュアップ市民の会は当日都合により欠席）

傍聴者 8名

市長、市民部長兼交流事業担当部長、多文化共生・交流課長、市民活動担当部長

1 開会

自己紹介

2 意見交換

（多文化共生社会の実現に向けての取り組み）

- ・外国籍の方が周りの方と関わる機会づくりに取り組んでいる。日本語学習支援では、小さなお子さんを持つ主婦の方であれば、病院への行き方や買い物の仕方、お店の従業員であれば、注文の受け方など、その人のニーズに合わせて日本語を学んでもらっている。
- ・多文化体験ウィークでは、外国人の方が持つ文化を活かしたプログラムを展開した。食を活かした交流事業として、料理教室やお菓子作りなども行った。料理教室はその国の文化を知る機会にもなっている。
- ・今までは、サービスを提供するのが日本人、享受するのが外国人であったが、料理などの得意分野で交流することで自信につながり、社会参画へのステップになる。外国籍だから助けられるという線引きをなくしていく必要がある。
- ・「多文化共生」は外国人だけではなく、日本人同士の間でも文化や考え方の違いはある。ユニバーサルマナーを学んだが、多くの施設・設備が多数派に合わせて作られているが、多様な視点で考える必要があると思う。
- ・日本語を学んだ外国人留学生などが、日本語を活かす仕事がしたいと思っても、入国制限や在留資格の取得などで苦勞している。武蔵野市のサポート体制はどのようになっているか。
- ・（事務局）市には、5か国語（英語・韓国語・中国語・ベトナム語・モンゴル語）は話せる職員がいる。現在は、iPadを使い14言語を通訳する機能を活用している。
- ・（市長）多数派に少数派が合わせるのではなく、お互いの良さを共有し、文化の違いを認め合うことが大切と感じた。

(外国籍市民と地域の交流について)

- ・ M I A (武蔵野市国際交流協会) 主催の「世界の家庭料理教室」で特別養護老人ホームさくらえんの E P A 職員 (経済連携協定に基づき、日本の介護福祉士資格の取得を目的に来日した看護または介護の有資格者) がナシゴレンとサンバルバラドという料理を作った。さくらえんの農業祭でもインドネシアのかき氷エスプアを作る。日本語は難しいが、ただ覚えるのではなく、人との交流の中で覚えている。
- ・ 日本語スピーチ大会は素晴らしい取り組みだと思う。スピーチを通じて思いを伝えることで、地域の方に自分のことや、国や文化について知ってもらう機会になっている。自分の自己肯定感も上がると思う。
- ・ 支援者と被支援者ではなく、対等な立場であることが重要である。私は知的障害者の支援をしている。マイノリティ対マジョリティといった壁をどのように壊し、理解者を増やすかが重要だが、関心のない人にどう関心を持ってもらうかが課題。これは多文化共生も同じである。孤立しがちな人を発見し、声かけをしていく必要がある。
- ・ コミセンの事業で、韓国人のママ友と韓国料理を作ったことをきっかけとして、大久保駅周辺散策ツアーの企画に発展した。また、国際結婚した中国籍の運営委員により、「中国を知ろう」という連続講座を開催した。新しい事業を行うきっかけになった。本人も地域の一人として受け入れられてうれしいと話していた。コミセンが地域の人同士をつなぎ、地域の方に喜ばれる場所になるとよい。
- ・ (外国人の) 地域連携が食べ物や音楽、文化ばかりに集中するのは良くない。生活支援の課題はまだ多くあるが、外国人とつながるきっかけとしては文化の力は大きい。以前、高齢者向けにモンゴルの民族音楽の演奏会を開催したところ、多くの申し込みがあり、追加公演を行った。文化の力を借りた生活支援は効果的である。
- ・ 市にはネパールの方が多。これまでは、中国の方が多くいたが、今では多様な国籍の方がいらっしやる。小学校入学時に保護者が購入しなければならない持ち物リストなどは、言葉での説明が多く、外国籍の保護者には理解が難しい。そこで、店員に写真を見せれば購入できるような資料を作成した。
- ・ 外国籍の保護者とかかわる上では、その国の言葉が話せなくても、やさしい日本語や身振り手振りを使い、伝えていくことが大切と感じている。行政用語はとても難しいが、わかりやすい言葉に置き換える工夫ができるとよい。
- ・ まち案内所で道を聞かれた場合、簡単な日本語で説明するよりも、地図を見せて、指をさすことで伝わる。外国の方々にたくさん来ていただける街を目指すならば、外国語の看板やマップを増やすことは、大切だと感じている。
- ・ 中学2年生のときに市の国際交流事業に参加した。その時の英語が通じた喜びや、異文化に触れあう経験が、その後の人生で国際的に活躍したいというモチベーションや多様な人たちの中で生き抜く力などにつながったと感じている。エジプトに留学した際、宗教や価値観の違いを理解してもらえず、モヤモヤしたこともあったが、なぜ相手がそのように考えるのか文化や歴史、背景を学ぶことで、相手に無理に合わせなくても、ともに生きていけることを学んだ。日本人同士であっても、

意見が対立することはあるが、なぜそのように考えるのか、そこに目を向けると、共存できると考えている。

- ・(市長) 意見が違っていても違うままでよいと考えられないことで対立が生まれる。自分と違う意見を持つ人と会うと、自分の意見を否定されているように感じがちだが、考えが全く同じ人はいない。どのように壁を取り除けるか考えていきたい。

市は、国際交流を36年間行ってきた。国際交流の意味は、平和だと考えている。

市は、2年前に自治基本条例を制定した。その中で、「市は、世界連邦宣言及び非核都市宣言の理念に基づき、戦争の悲惨さ及び尊さを次世代に語り継いでいくとともに、恒久平和を目指した活動を展開することにより、国際社会との交流及び連携並びに世界の人たちと相互理解を推進していくことに努めなければならないといけない」としている。日ごろからの交流を通じて、市が世界の人たちに開かれた都市である必要がある。多文化共生を明確にどうしていくか、示していきたいと思う。

(武蔵野市に望むこと)

- ・ニュージーランドのオークランドで、2年間外国人として暮らしていたが、住みやすい街だと感じた。その理由が二点挙げられる。

一点目は、移民を受け入れて、移民の方の力を得て経済発展を目指す考えがあること。外国人に対しても、公共サービスが充実していた。私も、外国人でありながら無料で出産ができた。

二点目が、生活をしていてマイノリティと感ずることがなかった点だ。大学に通っていたため、若い世代とかかわることがあったが、幼少期から多国籍の人がいることが当たり前といった環境で成長してきた人が多かったため、私にとって居心地がよかった。

私が留学中、白人がモスクに入って銃を乱射した悲しい事件があった。その際、「They are us」「彼ら(被害に遭ったイスラム教徒)は私たち(同じニュージーランドの住民)である」というメッセージが様々なところに掲げられ、ニュージーランドの社会全体でイスラム教徒と悲しみを共有していた。こうした社会の雰囲気のおかげで外国人も気持ちよく暮らすことができた。そのような空気を醸成することが外国人にとって住みやすいまちにするための課題と考える。

- ・(市長) 外国籍の方の考え方を尊重し、地域の仲間として、取り組んでいかなければならないと感じている。

2012年に外国人登録法が改正され、外国籍の方も日本国籍の方と同じ住民として住民登録する制度が変わった。住民とは武蔵野市に住む人であり、国籍要件はない。国籍にかかわらず、様々な人が活躍できるよう考えていきたい。

- ・市民を労働力として捉えてほしくないと考えている。共に同じ場所にいる人と人とが、お互いに助けあって行けたら良いと感じている。国際プラザの中で、在日外国人支援チームというものを、外国人だけで作っている。育児など外国人の方が困っている際に、支援を行っているが、外国人が日本人を助けることもあり、助けられるだけでなく、お互いに助け合う環境を目指しており、日常的にそういった活動ができればと感

じている。

- ・(市長) アウトリーチを必要としている方のために、市内のコミセンやテンミリオンハウスなどの集える場所での交流を増やしていけるとよい。
- ・国際交流協会は外国語が得意な人が行くところと考えている人も多い。日常的な生活支援をしていることをもっと周知したい。季刊むさしのなどの広報誌で、素晴らしい活動に取り組む外国人の方を紹介してはどうか。
- ・若い世代からの多文化共生への理解が必要と感じている。市内の小・中学校の授業に外国人を派遣しているが、子どもたちが外国人と触れ合うよい機会となっている。多文化共生プランについては、外国人の定義も様々なので、乗り越えるべき課題も様々ある。支援の対象となる外国人に必要な情報を届けることが重要で、その情報伝達の方法を工夫しなければならない。災害時の避難場所の案内など、優先的に対応が必要。やさしい日本語を使用することや掲示を増やすことなど、時間も手間もかかるが取り組む必要がある。
- ・市に望むことが三点ある。一つ目が、単なる顔見知りでなく、どこの〇〇さんといったように知り合う機会が増えればよい。
二つ目が、映像の力などを活用した啓発の機会があるとよいと感じている。市が企画し、多文化共生に関する上映会などのイベントがあればよい。
三つ目が、災害対策。以前、調布市で障害のある方の災害対策に携わった経験があり、課題が多く発見された。有事の対応は喫緊の課題と考える。
- ・(市長) 同じ地域に暮らす人々が年齢、国籍、文化、障害の有無、性別、性自認・性的指向等にかかわらず、その個性と能力を生かせる環境をつくることは、生涯にわたりいきいきと豊かで安心して生活することができる地域社会をつくる上で重要な要素である。そのような社会を皆さまとともに、力を合わせて引き継いでいき、人権が守られ平和な社会を構築できるよう、努めていきたい。

3 閉会